

卒業論文  
日本で暮らす外国人女性の子育ての現状と展望

慶應義塾大学法学部政治学科  
4年M組  
塩原良和研究会  
福元 理央

目次

はじめに

1章 増加する「外国に繋がる親子」

2章 外国籍の親と子が抱える問題

2-1 子が乳幼児のケース

2-2 子が学齢期のケース

3章 学齢期の子育てにまつわる苦悩

—————ラオスから来た母親へのインタビューを通して

4章 外国につながる母親たちへのサポート

4-1 行政やボランティアグループが用意したサービス

4-2 外国人の母親たちのコミュニティ

5章 外国人の母親へのサポートの理想的なあり方とは

おわりに

はじめに

近年外国人登録者は年々増加傾向にあり、2008年にはその数は200万人を超え、日本で生活する外国人の子どもの数も格段に増えている。川崎市や横浜市、東京都豊島区には、両親が外国籍または父母の一方が外国籍である子どもが多く通う保育所が多くある。

李節子によると、ニューカマー<sup>1</sup>の年齢別人口構造における15歳未満の学齢人口では、0歳児から4歳児の人口がもっとも多く<sup>2</sup>、また厚生労働省の統計によれば、両親の一方が外国籍である子どもの出生数は増加傾向にある<sup>3</sup>。このことから、両親に連れられて日本にやってくる未就学児と、日本で生まれる外国につながる子どもがともに年々増えていることがわかる。

このような外国につながる子どもとその両親が抱える問題は数多くある。子どもが抱える問題としては、自我形成の時期に家庭内での使用言語・文化と保育所・幼稚園でのそれらが異なるという混乱を経験することによるアイデンティティの不安定化や、母語と日本語のどちらを用いてもうまく自己表現できない「セミリンガル」状態になってしまうといった事例がある（後述）。一方両親も、日本の保育所に子どもを預けることへの不安や、保育者・他の保護者とのコミュニケーションの困難、子どもが病気やけがにかかった時の対応など、不安は尽きないと言われている。特に、子どもは保育所や幼稚園で同年代の友達と交流する中で自然と日本語を習得していくことができる一方で、家庭にいる外国出身の親はなかなか日本語を学ぶ機会がないというのが現状である<sup>4</sup>。

本論文の目的は、今後ますます増加するであろう「日本で子育てをする外国人のお母さん」をエンパワーメントすること、そしてそれを支える地域社会をもエンパワーメントすることにある。外国人の母親に限らず、親ならば誰しも子育てに関する苦悩を抱えるものであろう。日本で子育てをする日本の母親たちならば、その悩みを気軽に身近な友人や自分の母親に相談することができるかもしれない。しかし外国人のお母さんはどうだろうか。彼女たちがどんな悩みを抱え、どんな人に相談しているのか、日本のお母さんたちは、そして私たちは知っているだろうか。子育ては親のみならず、近隣住民、学校、地域等複数の機関や人間が関わっていくものである。だからこそ、当事者ではない人間が、外国人の母親の子育ての現状を把握しておくことは決して無価値ではないはずだ。国籍を問わず、現在子育て中のパパ・ママ、昔子育てを経験したパパ・ママ、いずれパパ・ママになるであろうすべての人たちへ向けて、この論文を執筆する。「外国人の日本での子育て」については、まだ研究が進んでいないのが現状であると筆者は認識している。本論文がそ

---

<sup>1</sup> 1980年代以降に来日し、定住した外国人をさす。

<sup>2</sup> 李節子、1998年、『*在日外国人の母子保健*』、医学書院、30頁

<sup>3</sup> 総務省統計局、独立行政法人統計センター 政府統計の総合窓口 HP

(<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001066472>) 2010年12月10日アクセス

<sup>4</sup> 山岡テイ、2007年、『*多文化子育て*』、学研、9頁

の足掛かりになれば幸いである。

本論文では、まずは1章で日本における外国籍の両親やその子どもの数を統計データによって明らかにしたうえで、2章で先行研究の調査結果をもとに、日本で生活する彼らの現状を提示する。続く3章では、ラオスから来日し、実際に日本で3人の子どもの子育てを経験した女性のインタビューを紹介する。これを踏まえ、4章では、平成20年の外国人登録者数が121,515人に達した埼玉県<sup>5</sup>で活動している、多文化育児サークルの調査結果を述べる。5章では「外国につながるお母さん」と地域社会双方にとって有意義な「場」とはいかなるものか、提言していきたい。

## 1章 増加する「外国につながる親子」

1980年代後半以降に日本に入国・居住した外国人、いわゆるニューカマーの数は年々増加傾向にあり、法務省が発表した2009年末における外国人登録者統計によると、その数は2,186,121人であった。外国人登録者の国籍は中国が680,518人ともっとも多く全体の31.1パーセントを占め、以下、韓国・朝鮮(578,495人、26.5パーセント)、ブラジル(267,456人、12.2パーセント)、フィリピン(211,716人、9.7パーセント)、ペルー(57,464人、2.6パーセント)、米国(52,149人、2.4パーセント)と続いている<sup>6</sup>。

このような状況に伴って、いわゆる「国際結婚」の数も増加している。厚生労働省の人口動態統計によると、2009年の日本での婚姻件数は70万7734件で、そのうち夫や妻の一方が外国人の婚姻件数は3万4393組であった。これは全体の婚姻件数の4.8パーセントを占める。前年(2008年)より2576組減少しているものの、1965年と比較すると約9倍になっている。特に、妻が外国人の婚姻件数が国際結婚の78パーセントを占め、これを妻の出身国籍別に見ると、中国が圧倒的に多く、次いでフィリピン、韓国・朝鮮と続く<sup>7</sup>。

また、そのような国際結婚カップルの子どもの出生数も増加している。2009年の日本における出生数1,070,035人のうち、国際結婚カップルの子どもの出生数は22,511人で、全体の2.1パーセントを占める。そのうち父親が日本人、母親が外国籍の子どもの出生数は12,707人で、特に母親の国籍が中国ないしはフィリピンである子どもの出生数はそれぞれ4,209人、3,815人と圧倒的に多く、両者を合わせると、母親が外国籍の子どもの出生数うち60パーセント以上を占めることとなる<sup>8</sup>。

---

<sup>5</sup> 埼玉県 HP (<http://www.pref.saitama.lg.jp/site/keikakutoukei/gaikokujintoroku.html>) 2010年12月13日アクセス

<sup>6</sup> 法務省 HP (<http://www.moj.go.jp/content/000052445.pdf>) 2010年12月10日アクセス

<sup>7</sup> 総務省統計局、独立行政法人統計センター 政府統計の総合窓口 HP (<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001028897>)2010年12月10日アクセス

<sup>8</sup> 同上 (<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001066472>) 2010年12月10日アクセス

少子化の影響から、2009年の父母が日本国籍の子どもの出生数は1987年に比べて27万人以上減少している。その一方で、父母の一方が外国籍である子どもは1987年に比べて2倍以上になっており、全体に占めるその割合は今後も増加していくことが見込まれる。つまり、日本で生まれる子どもの多文化化がますます進むことは必至であり、それに対応する為の育児環境を整える事が急務だと言える。

本論文においては、このような子どもたちが学齢期に達し、日本の学校に就学した後の親の子育てにも言及したい。よって、以下に日本の公立校における外国人児童生徒の統計を記す。総務省の調査によると、公立学校に在籍している外国人児童生徒数は、2008年5月1日時点で75,043人、日本語指導を必要とする外国人児童生徒は同年9月1日時点で28,575人に上る。これは調査開始以来最も多い数であるという。日本語指導が必要な外国人児童生徒が在籍する公立学校は6,212校あり、実際に日本語指導を受けている外国人児童生徒は24,250人。内訳をみると、日本語指導が必要な外国人児童生徒のうち94.8パーセント、また実際に日本語指導を受けている外国人児童生徒のうち93.7パーセントは、親との繋がりが密接であることが予想される小・中学校の生徒である<sup>9</sup>。

## 2章 外国籍の親と子が抱える問題

### 1節 子が乳幼児のケース

ここでは、日本で生活する外国籍の親子、特に子が乳幼児の場合に彼らが抱える問題にはどのようなものがあるか、先行研究をもとに紹介していく。

山岡テイを中心とする「多文化子育てネットワーク<sup>10</sup>」が2000年に行った、日本語を母語としない保護者の日本での子育ての実情調査によると、子どもを保育所や幼稚園に通わせている保護者の気がかりで最も多いのが「いじめ」であった。調査対象である65カ国2002人の親のうち、32.0パーセントが「いじめ」を最も気がかりであるとして解答した。自由記述欄には「日本語が話せない、肌の色などと差別や仲間外れにされたことが、子どもの心の痛手になるのでは」などの声があった<sup>11</sup>。「いじめ」に対する懸念は日本の滞在年数が長い両親であっても変わらず、滞在時間が10～20年の親でも、28.6パーセントが気がかりであると解答していることがわかった<sup>12</sup>。

---

<sup>9</sup> 文部科学省

([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/21/07/\\_icsFiles/afieldfile/2009/07/06/1279262\\_2\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/07/_icsFiles/afieldfile/2009/07/06/1279262_2_1.pdf)) 2010年12月10日アクセス

<sup>10</sup> 多文化子育てネットワーク <http://www.tabunkakosodate.net/>

<sup>11</sup> 山岡、前掲書、13頁

<sup>12</sup> 山岡ら、子育てネットワーク資料

([http://www.tabunkakosodate.net/japanese/report/pdf/ch3\\_j6.pdf](http://www.tabunkakosodate.net/japanese/report/pdf/ch3_j6.pdf))

次いで多かったのが「裸足保育・薄着」という項目で、これは全体の 27.5 パーセントを占める。内訳を見ると特に中国人の母親の解答が多いが、これは中国の、室内でも靴を履かせたり乳幼児に厚着をさせたりする習慣との差に戸惑うもののようで、「子どもが風邪をひかないか心配」との声があった。以下、「日本語や日本の食べ物に慣れ過ぎて母語や母国の食べ物を遠ざけるようになる」(17.5 パーセント)、「保護者の参加行事が多い」(17.4 パーセント)、「保護者が準備することが多い」(17.0 パーセント)と続く<sup>13</sup>。

見た目による差別やいじめを懸念する声がある一方で、見た目による差異がほとんどないがゆえに子どもが苦しい思いをするケースもある。以下で柴山真琴が 1993 年 10 月から 1994 年 4 月までの 7 カ月間に行ったフィールドワークの結果を見ていく。柴山は、東京都内のさくら保育所(仮名) 4 歳児クラスに入所した中国人男児の O を観察対象とし、エスノグラフィーの手法で調査した。当初、ひとつのオモチャを皆で使うような場面では、同じクラスの幼児たちが O に譲る場面が多く見られたという。O の見た目が日本人とほとんど変わらないがゆえに見た目による差別や仲間外れが起こりにくかったということも考えられるが、事前に担任の先生が「O ちゃんは言葉がわからないから」と 4 歳児クラスの子ども達に紹介したことを踏まえると、幼児たちは O を気遣いながら遊んでいたのかもしれない、と柴山は述べている。しかしその後、子ども達の関係に変化がみられる。ある日 O が赤いバットを持ち出したとき、別の幼児が「K ちゃんのバット、とられた!」と声を上げ、「これ、K ちゃんの、K ちゃんが使ってたの」と、O が赤いバットで遊ぶことを妨げる。ほかの幼児二人は、「ダメー!」と泣き出しそうになっている O の前後から赤いバットを取り上げようとした。他の幼児 対 O という対立のなかで「O がバットを独り占めする」という状態が可視化された」と柴山は述べる。後日、その幼児が O に対して否定的な感情を持っていることがわかるような出来事が起こる。食事の時間、おかずのなかの大根をちぎりはじめた O に向かってある女児が「何やってるの?」と声をかけるのだが、例の幼児は「ほっとけばいい!この人ね、お話聞かないから、俺もう嫌いな。」と言ったという。

同時期の別の食事の場面で、O と同じテーブルで食事をしていたある幼児が「O ちゃん、肘ついて食べちゃだめだよ」と注意を促すのだが、O は行動を変えない。そこでその幼児が「O ちゃん、何回言ってもわからない」と発言するのだが、一緒に食事をしていた担任の A 先生がそれに対して「うん」と答える。ここで、「O=お話を聞かない子」という認識が、幼児たちのみならず先生にも共有されていたことがわかる、と柴山は指摘した。柴山が二人の担任の先生に O の近況を聞くと、いずれも「ちょっとわがままなところがある」「わがまま」と異口同音に答えたという<sup>14</sup>。

このケースは、当初、「O ちゃんは言葉がわからないから」という担任の先生の紹介から「日本語が話せないのは大変なことだ。O ちゃんはさぞ大変だろう」という推論を導いた幼児たちが、初めは O にオモチャを譲るなどの気遣いをし、O と関係を築いていくが、親

<sup>13</sup> 山岡、前掲書、13 頁

<sup>14</sup> 柴山真琴、2006 年、山田千明編『多文化に生きる子どもたち』、明石書店、37～51 頁

しくなるにつれて「Oちゃんは言葉がわからない子」という認識が薄らぎ、「人の話を聞き入れない、わがままな子」という理解へと変化した例である<sup>15</sup>。これはOの外見的特徴によるところも大きい、と柴山は述べる。幼児が自他の認識や他者理解をする際、髪の毛や肌の色・言葉の違いといった目に見える特徴を手掛かりにするとされている<sup>16</sup>が、Oの外見的特徴は日本人のそれとほとんど変わらず、「日本語がわからない外国の子である」というOの情報を他の幼児たちに提供しづらかった、というわけである。

柴山はこのOのケースに関し、保育者の対応について言及している。幼児同士が文化的背景や言語を共有していない場合は、保育者が双方の間に立ち幼児同士の相互理解を助ける状況を提供する等、適切な支援が必要だと述べる。先に述べたように、幼児たちは初めに担任の先生から「Oちゃんは言葉がわからないから」という紹介を受けただけで、その後はOの背景にまつわる情報を与えられず、目に見える外見行為だけでOの内的性格を推論せざるを得なかった。実際にはこの頃のOは日本語でも中国語でもうまく自己表現ができない「セミリンガル」状態であったにも関わらず、それが可視化されないため、幼児たちはOが「言葉がわからない」ことを忘れ始めた、と柴山は指摘する<sup>17</sup>。そこで、担任の先生が積極的に幼児たちにOの情報を提供することの必要性をとなえているのである。

保育者の声かけは、他の幼児に対してのみならず、親に対しても期待されている。

山岡は、「気がかりなこと」の調査に加え、「子育て付き合い積極的・親和性傾向」を調査した。これは、子育て付き合いへの意識や親和性を6項目4段階評定で尋ね、それらの項目の得点を加算した結果をまとめたものである。山岡はこれを、得点の高いグループと低いグループとに同じ比率で分け、それぞれのグループ間で先生とのコミュニケーションを比較した。

その結果、積極的傾向の高いグループの母親は「自分から先生へ努めて話しかける」「行事や保護者会等に積極的に参加する」等、コミュニケーションに対して積極的である一方、積極的傾向の低いグループの母親は、保護者との付き合いや参加行事が多いのを負担に感じる等深刻な悩みを抱えていることが明らかになった。

より詳しく見ていくと、積極的傾向の低い多くの母親は「園生活に慣れるのに役立ったこと」という項目で、「先生が母語で言葉がけをしてくれた」ことが役立ったと答えていることがわかった。つまり消極的な傾向のある母親は、先生の方から声をかけてもらうことを期待している、というのが山岡の出した結論である<sup>18</sup>。

## 2節 子が学齢期のケース

次に、子が日本の学校に通っている場合、外国人家族がどんな問題に直面するかを見て

---

<sup>15</sup> 柴山、前掲書、54頁

<sup>16</sup> Aboud,F.,1988,*Children and prejudice*, Basil Blackwell

<sup>17</sup> 柴山、前掲書、55～56頁

<sup>18</sup> 山岡、前掲書、17頁

いきたい。

そもそも、日本では外国人児童をどのように扱う事を原則としているのか。文部科学省の帰国・外国人児童生徒教育に関する施策の冒頭部分をここで紹介する。

帰国児童生徒については、単に国内の学校生活への円滑な適応を図るだけでなく、海外における学習・生活体験を尊重した教育を推進するために、帰国児童生徒の特性の伸長・活用を図るとともに、その他の児童生徒との相互啓発を通じた国際理解教育を促進するような取り組みが必要です。

また、外国人の子弟には就学義務が課せられていませんが、我が国の公立小学校・中学校への就学を希望する場合には、これらの者を受け入れることとしており、受け入れた後の取扱いについては、授業料不徴収、教科書の無償給与など、日本人児童生徒と同様に扱うことになっています。このような外国人児童生徒の我が国の学校への受入れに当たっては、日本語指導や生活面・学習面での指導について特段の配慮が必要です<sup>19</sup>。

ここで注目すべきは、日本の教育制度においては外国人児童を「日本人児童生徒と同様に扱う」ことを原則としているという点である。しかし、たとえば日本語をほとんど解さないニューカマーの子どもたちを「日本人児童生徒と同様に扱う」ことは現実的には不可能である。その場合に「特段の配慮」がなされるわけだが、これは教師の二つの行為を通してなされると清水睦美は述べる。一つは「直接的支援」、すなわち教師がニューカマーの子どもに対して直接行うもので、例えば放課後、教師が子どもを特別に呼び出して、教室で教師が伝達した内容が伝わっているかどうかを確認するなどといった支援である。もう一つは「間接的支援」、すなわち、日本人の子どもに対してニューカマーの子どもの行為に注目するように注目するよう伝え、その行為が逸脱した場合に、それを補正するような対応をするよう日本人の子どもに促すというものである<sup>20</sup>。

こういった「特段の配慮」は、ニューカマーの生徒が日本の学校である程度「やれている」と判断されるまで続けられ、生徒が「やれている」状態になったと教師に判断されると、彼らへの対応は「特別扱いしない」方向に転換されると清水は述べた<sup>21</sup>。

生徒が「やれている」状態に達したか否かを判断するのは教師であるが、これは、「日本語による教師の指示や子ども同士のやりとり」に大きな逸脱がないかどうかで判断される。つまり教師がニューカマーの子どもに対して「やれている」と判断する基準は、日本の学校生活に適応できているかどうかということであり、教育内容の習得状況は問題とされないことを清水は指摘している。ここで判断される「やれている」という状況は、日本語能

<sup>19</sup> 文部科学省 HP ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001.htm))

<sup>20</sup> 清水睦美、2006年、『ニューカマーの子どもたち 学校と家族の間の日常世界』、勁草書房、30頁

<sup>21</sup> 清水、前掲書、45頁

力の向上のみで生み出されているわけではなく、教師の指示に対する日本人の生徒の反応等を手掛かりにして生み出されている事の方が圧倒的に多いというのである。

このようにして教師に「やれている」と判断されたニューカマーの子どもは、学校で「特別扱いしない」状況に置かれることとなる。それはすなわち、「わからない」と言える場を失うという経験と連動していくことでもある<sup>22</sup>。その上、「特別扱いされない」状況の中で不適応は、努力が足りないという個人の問題として処理されてゆく。それゆえにニューカマーの子ども自身も自らの言語的ハンディキャップに気付きにくい。あるニューカマーの子どもが「外国人はバカだから高校に行くのは無理だ」と話したというフィールドワーク記録を清水は紹介しているが、「外国人はバカだ」という解釈はこのような教師の対応ゆえであろう<sup>23</sup>。そして清水は、このような「やれている」という状況に覆い隠されたニューカマーの子ども達の日常を「不安な毎日」と呼ぶのである<sup>24</sup>。

一方教師は、いったん「やれている」と判断されたニューカマーの子どもたちが、日本人の子どもと変わらない状態にはない、あるいは至らないとき、その根拠を母国の社会的・文化的要因に求める。たとえば、「向こう（母国）では、学校へ行くか行かないかは決められるみたいだから、学校やめるって決めようかっていうようなことを（あるニューカマーの子どもが）いつも言ってくる。」という、清水のインフォーマントである日本人教師の発言にもその傾向が見られる<sup>25</sup>。また、日本人の子どもと変わらない状態にはない場合にその根拠としても一つ挙げられるのが、家族である。別の日本人教師は、欠席の続いていたニューカマーの生徒 A に関して、「2 学期はどうなるのか非常に心配です。（彼の）お兄さんの S も、以前 2 学期からほとんど登校しなくなってしまった……。ということですので。」と清水に語っている。この教師は、S 本人を直接には知らない。それにも関わらず、S と関連付けて A の不登校傾向を説明しようとしている。この背景に「家族」を問題の根拠とする認識枠組が存在していることがうかがえると清水は指摘しているのである<sup>26</sup>。

では実際には、学齢期の子どもを抱える家族内部の状況とはどんなものか。次章で、ラオスから来日し日本で 3 人の子どもを育てた経験のある女性のインタビューを紹介しつつ、子育てする母親の実態の一例をみていく。

### 3 章 学齢期の子育てにまつわる苦悩

———ラオスから来た母親へのインタビューを通じて

本章では、日本での育児を経験したある外国人女性の経験を紹介し、外国人の日本での子育ての様子やそれにまつわる問題について検証したい。

---

<sup>22</sup> 同上、32～33 頁

<sup>23</sup> 同上、43 頁

<sup>24</sup> 同上、33 頁

<sup>25</sup> 同上、91 頁

<sup>26</sup> 同上、94 頁



2010年8月、ラオス出身で3人の子どもの母親であるUさんに、インタビューに応じてもらった。彼女は1981年に、弟の学費を稼ぐために初来日した。一カ月ほどして体調を崩し一度帰国したが、再び洋裁の学校に通う為に学生ビザで再来日し、アルバイト先の飲食店で知り合った日本人男性と結婚した。現在、26歳（女）、23歳（女）、21歳（男）の3人の子どもがいる。長女が2歳のとき日本に帰化し、現在は日本名を名乗っている。

### ○食べ物に関して

Uさんは、子育てに関して最も大変だったのは食べ物と言葉であると答えた。まずは食べ物について、長女が幼かった頃のエピソードを聞いた。

えり（仮名・長女）のとき、母乳があまり出なくて大変だった。粉ミルクの使い方がわからなかったから、練乳をあげていたの。ラオスでは子どもを練乳で育てるから。離乳食は市販のものは買わなくて、全部手づくり。おかゆにお肉や人参を細かくしたものをに入れて食べさせていた。

えりはお肉が好きで、私もえりが小さい頃からお肉ばかりあげていたの。それと、私がお刺身を食べられなくて、えりにも食べさせなかったから、今もえりと私だけ家族の中でお刺身とか生ものは食べられない。

ラオスはいつも暑いから、日本の冬はすごく寒く感じる。（注：Uさんが体調を崩したのも、日本の気候が原因だった）だから冬になるとえりを連れてラオスに帰っていた。それでまた暖かい季節になったら日本に戻る。えりがなかなか日本の食べ物に慣れなかったのはそのせいもあったと思う。今は悪かったなあと思って反省してる。

この話から、Uさんは「日本の食べ物に慣れるのに苦労した」というよりは、「慣れない食べ物を極力避け、母国であるラオスの食べ物で長女を育てることに腐心した」という印象がある。食べ物だけではなく言葉に関しても、えりさんは幼少の頃ラオス語を話せていたことを教えてくれた。

えりは昔はラオス語話せたよ。でも学校に通うようになって、日本人の友達や先生と一緒にいる時間が長くなってからは、日本語ばかり。

そしてインタビューの中で、Uさんは何度もえりさんと次女・長男を区別してこのように話す。

えりはラオスの **custom** で育てたけど、下の子（次女）とゆうき（仮名・長男）はもう最初から日本人で（日本人として、の意）育てた。

あの二人（次女と長男のこと）はもう日本人だからね。

こう話すときの U さんの表情は曇りがちである。

### ○母国との繋がり

山岡の「子育ての生活の中での気がかり」調査で第一位となったのは「母語教育や母国の文化を学ばせること」という項目である。山岡は、母語や父語、さらに母国語を学ぶ機会が少ないことへの危機感は、祖父母との交流や子どものアイデンティティの確立など根源的な問題を含んでいると指摘する<sup>27</sup>。

詳細は後述するが、筆者は埼玉県で活動している子育てサークルを訪問した。そこに参加していた、2歳の娘をもつモンゴル人女性に、「家ではどの言葉で娘さんと話していますか」と質問してみた。返って来た答えは「私がモンゴル語で話して、A（娘）が日本語で返すこともある。Aはモンゴル語も少し話せるよ」との事であった。「ママの言葉（モンゴル語）もAちゃんに教えたいですか」との質問には力強くうなずいた。

Uさんも、「子ども達にラオスの言葉や文化を勉強してほしい」と話した。清水も、自身のインフォーマントであるラオス人の家族を紹介する中で、母親が子どもにラオス語を話してほしいと思っていることについて触れている。そしてこの傾向は、親に母国回帰の意志があるからではなく、「親子の地位関係を確立することを促し、それによって、家族として日本で安定して暮らしていくことをねらったものだ」とした<sup>28</sup>。また新田文輝は、自分の血肉となっている母語を子どもと共有したいという、母親の心理的・社会的欲求を指摘したうえで、「一部の外国人の母親は、自分自身のことばを使わなければ、自分の文化に深く根差す特定の事どもをこどもに伝えることはできないと感じている。」と述べている<sup>29</sup>。ただ、「私がそう（ラオスの言葉と文化を学んでほしいと）思っているのは子どもには内緒」というUさんの話からわかるように、Uさんにとって子どもに母国語を覚えてほしいという思いは自分の内に秘めた願いであるようだ。Uさんは、「でもそれ（ラオスの言葉と文化を学ばせること）は難しいね。無理強いはできないからね」と話す。「Aちゃんにママの言葉を教えたいですか」との筆者の質問に力強く頷いた、先述のモンゴル人女性とは対照的である。「ラオスの **custom** で育てた」という第一子が日本の学校に通い、だんだん「日本人」となっていく過程を目の当たりにしてきたUさんだからこその言葉であろう。その表情は、「日本社会で生きていくわが子のためを思う母親の気持ち」を語ることで、ラオスの

<sup>27</sup> 山岡、前掲書、20頁

<sup>28</sup> 清水、前掲書、104頁

<sup>29</sup> 新田文輝、1992年、『国際結婚とこどもたち 異文化と共存する家族』、明石書店、54～55頁

文化を継承したいという U さん自身の欲求を押し殺しているような、やるせないものであった。

### ○U さん自身の言葉の問題

U さんは日本語教室のようなところには一切通わず、独学で日本語を覚えた。来日したばかりの頃にアルバイトで働いていた飲食店は、客のオーダーを伝票に手書きで記入するシステムで、仕事を通して日本語を徐々に覚えたのだという。

私、おしゃべり大好きだからたくさんしゃべるの。でも最初は、こっちがいっぱいしゃべっても、日本人に「えっ？」って顔されるのがつらかった。

でも、間違いでもいいからたくさんしゃべった方がいいね。

現在の U さんは、日常会話で苦勞することはあまりないようである。しかし、話がやや高度になると「よくわからなくなる」というし、長い文章を読んで内容を把握することは困難なようだ。現在働いているレストランで、従業員向けの連絡ノートに書かれた連絡事項（新しいメニューや新しいシステムの説明・注意点など）もほとんどわからないという。

でも、みんな忙しいからいちいち聞けないね。

私が日本語よくわかってないから、〇〇さん（別の従業員）イライラしてるよね。

（福元）イライラしてるって、感じますか？

感じるよお！お客さんも。（客に理不尽な要求をされ、規則に則って断った時に）「日本語大丈夫？」って言われたこともあるよ。

日本語教室などに通わない理由については、「そんな時間ないよ」とのことだった。実際、U さんは現在パート勤務を二つ掛け持ちし、ほぼ毎日働いている。ただ、そのほかに日本で卓球サークルに入っていたり油絵を本格的に習っていたりした過去があり、現在も個展に向けた準備で毎日忙しいのだと言う。仕事とともに趣味の時間も充実していることに加え、ラオス語と日本語のほかにも英語、タイ語、ベトナム語、広東語、北京語を話せるなど U さんの語学を習得する能力の高さもあり（本人も外国語の勉強が好きだと言っていた）、あえて日本語教室のために時間を割く必要性を感じなかったのだろう。

しかし、子どもが小さい頃には、自身が日本語を話せなかったがために苦勞したことがあったという。

## ○いじめの問題

インタビューをはじめてすぐ、Uさんはえりさんが学校でいじめに遭っていた話を教えてくれた。

えりが学校でいじめられて。昔S町の団地に住んでいたんだけど、朝になると団地の屋上に逃げて、学校に行こうとしないの。はじめはどうしてかわからなかった。

あるとき、ソファーとか大きなものが突然宅急便でうちに届いたのね。請求書も来て。あとでわかったんだけど、えりのクラスのいじめっ子がうちの住所を使っていたずらしたのよ。

さすがにお父さん（夫）が怒って、学校に怒鳴りこんだりした。

いじめの原因は、自分が外国人であることだとUさんは言う。

私、最初の頃は全然日本語が話せなかったの。だからえりの先生とも話せない。それで「お母さん外国人だ」って、いじめられたみたい。私のせい。

未だに、ゆうきが学校から帰ってきたら私が鞆のなかを全部出して、手紙（学校で配布される保護者向けのプリント類のこと）がないか確認するの。「手紙を読んでないのはお母さんが日本人じゃないから」って、ゆうきがいじめられたりしないように。

2章で、ニューカマーの子どもたちが日本人の子どもと変わらない状態にはない、あるいは至らないとき、教師はその根拠を母国の社会的・文化的要因や家族に求めがちであると述べた。上述のUさんの話から、そのような推論のやり方がえりさんのクラスの生徒たちの間にもあったことがうかがえる。また一つ注目すべき点は、自分の子どもを取り巻く日本人児童がそのような認識を持っていることをUさん自身が自覚していることである。「お母さんが日本人じゃないから」といってゆうきさんがいじめられることのないように、Uさんは学校の配布資料にきちんと目を通し、学校が保護者に求めていることを忠実に守る、また子どもに守らせることによって「日本人のお母さん」と同じように振る舞おうとしているのである。「子どもがいじめられるのは自分のせいだ」と考えたうえでそのように努力してきたUさんの気持ちは、いかなるものであったらうか。

えりさんは、小学校5年生から中学生になるまで不登校を続けたという。しかし、「えりの中学の先生がすごくいい人だった。」とUさんは続ける。

先生が心配して、何度もうちに来てくれたの。それで、「お姉ちゃん（えりさんのこと）は学校には行かないけど、お母さんのことは尊敬しているから大丈夫」と言ってくれた。本当にいい人だったよ。

この先生というのは日本人であるが、学校関係者が介入し声かけをしたことがUさんに少なからず安堵感を与えたようであった。また、高校の先生も熱心で、えりさんを都内の外語大学に推薦してくれたという。

「子育てや日本で暮らすことへの不安を誰に相談しましたか」という質問に対し、Uさんは市役所と答えたが、相談内容について問うと、「日本の食事や子どもの健康について」と答え、子どものいじめに関する問題については相談しなかったという。

前述の山岡の調査結果に「消極的志向の高い母親ほど、先生の声かけが園生活に役立つ」とあるが、積極性の高低に関わらず、自分からは外部に相談を持ちかけにくいデリケートな問題を抱えているケースも考えられる。その場合、相談を待つのではなく、周囲の人間が関心をもって声かけをすることの意義は大きいだろう。

### ○Uさんにとっての転機———PTA活動

Uさんは、次女が中学1年生のときと、長男が小学3年生のときにそれぞれの学校でPTA活動に参加し、役員を務めた。長男が高校生ときにはPTAの副部長を務め、卒業式では壇上の来賓席に座ったことを誇らしげに話してくれた。

役員会議のときは、カセットに録音して家で何度も聞いてちゃんとわかるようにした。わからないところはお父さんに教えてもらったり。

役員だからよく学校に行って、そこでほかのお母さんたちと人間関係を（築いた）。先生にも良くしてもらったし、本当、役員やって良かったよ。すごく楽しかった。ゆうきが卒業のとき、役員皆で「慎吾ママ」と「モー娘。」を踊ったの（笑い）。ちゃんとCD買って、練習して。そうやって皆でなにかやるのが好きだから、楽しかったよ。

「役員やって、日本語も覚えたり、言葉を覚えたら日本人のお母さんたちとたくさん知り合いになれた。」と話すように、Uさんは日本でのPTA活動の経験を肯定的なものとして捉えている。組織のあり方や会議の様子については一切言及せず、「お母さんたちの集いに参加できたこと」を良い経験としているようだ。

しかし、日本のPTAに不満を持つ声もある。以下は、新田によるあるアメリカ人女性に対するインタビュー記録である。

わたしもちよくちよくPTAの会合に出席するんだけど、PTAでの話し合って、作りものみたいだし、退屈ね！

あの席って、ある意味で本当に苦痛なんです。皆さんただ座っているだけで何も発言なさらないから、わたしが何か言うんですが、それでも誰かが賛成するわけでも、

反対するわけでもないんです<sup>30</sup>。

新田は、アメリカ人女性が日本の PTA の形式主義、気詰まりな沈黙について不満を持っていることを指摘した。ここに U さんのケースとの相違点がある。

このような違いが出るのはなぜだろうか。U さんと、アメリカ人の母親がそれぞれ PTA という組織のどこに注目しているか、ということに注意したい。あるアメリカ人の母親は PTA の話と関連付け、日本の学校は生徒や家庭に介入し過ぎるとして、学校の機能そのものにまで不満を口にしている。しかし U さんは、筆者の「PTA 活動はどんなものでしたか」という質問に対し、会議で何が話されたか、どんな決まりごとがあったか、といった PTA の中心となる活動内容には全く言及せず、どちらかといえば周辺の活動であるといえる卒業式での出し物や、他の役員とのおしゃべりの内容ばかり話した。先述したとおり、U さんは PTA を「お母さん同士の集い」として認識し、他の日本人の母親と交流し日本語を習得する場として活用したのである。U さんにとって、学校の生徒・家庭への介入や PTA 本来の機能の良し悪しはさして問題にならなかったのだと解釈できる。

しかし、U さんはインタビューの後半、ぼつりと以下のように話した。

私は日本の知り合い多いけど、日本人の友達はいないね。子どものことになるとみんな喋るけど、私のこと興味もって話してくれる人はいないよ。だから寂しい。

U さんのなかで、「日本人の知り合い」と「日本人の友達」とが区別されていることがわかる。そして、前者は多いが後者はいない、それが寂しいと語っているのである。

U さんのいう「日本人の知り合い」は、PTA 活動を通じて知り合った日本人の母親たちのことであると推測できる。U さんが、筆者の「PTA のお母さんたちとは今も会ったりしますか？」との問いに、「子どもが大きくなったからもう会わないね」と答えた直後、上述のように呟いたからである。

U さんと PTA の他の日本人の母親を結び付けたのは、同じ学校、学級に子どもが通っているという共通の事実であり、また PTA の役員会議という形式的な場である。やがて子どもたちが卒業し、それまで母親同士で共有していた事実がなくなると、その子ども達の母親同士を繋ぐ場であった PTA も解散し、母親たちが接触を持つ機会は自然と減少する。ここで見られるような母親同士、ないしは U さんと他の日本人の母親との人間関係を「弱い繋がり」と呼ぶことにする。

ところが、である。PTA で培われてきた人間関係は確かに「弱い繋がり」であったかもしれないが、U さんが日本語を覚え、日本社会に参入するきっかけを提供したという点においては、非常に強い力を持っている。U さん自身も語っている通り、PTA 活動が U さんにとって有意義なものであったことは間違いないだろう。このことは、社会関係資本という観点か

---

<sup>30</sup> 新田、前掲書、166～167 頁

ら説明ができる。ブルデューは、社会関係資本を「さまざまな集団に属する事によって得られる人間関係の総体。家族、友人、上司、同僚、先輩、同窓生、仕事上の知人などいろいろあるが、そのつながりによって何らかの利益が得られる場合に用いられる概念で、いわゆる『人脈』に近い」とした<sup>31</sup>。UさんはPTAという集団に所属し、そこで他の日本人の母親たちとの人間関係を築いた。それが例え「弱い繋がり」であったとしても、日本語で会話を交わし日本社会に踏み出す、というUさんにとっての大きな利益を生みだすのに一役買ったのである。したがって、UさんのPTA活動は、大きな社会関係資本の獲得に結び付いたと言えるのである。

ナン・リンも、著書の中でこのような「弱い繋がり」に言及し、「紐帯が弱いほど、よい社会関係資本へのアクセスがしやすくなる」と述べた。強度が弱く、親密さが低く、接触頻度は低く、義務が少なく、そして互恵的サービスを提供することも少ない事で特徴づけられる弱い紐帯とは、弱ければ弱いほど、保有資源の類似性が低くなる。必要な情報が自分の交際圏にない場合、行為者は他の交際圏とのアクセスを試みるだろう。つまり行為者本人が弱い関係の紐帯を通して他者と接触する際には、ヒエラルキー構造の上端あるいは下端へと向けて到達するのである。加えて、人はいくらか高い社会的地位にいる他者と付き合うことを好む傾向があるため、ヒエラルキー構造上端の他者と下端の他者とでは前者との接触を好むことが考えられる。このようなプロセスを経て、行為者にとってよい社会関係資本へのアクセスがしやすくなる、というわけである<sup>32</sup>。

しかし今、Uさんは「日本人の友達」を求めている。「日本人の知り合い」がPTAで知り合った母親たち、すなわち「弱い繋がり」の人間関係の事を指すのであれば、「日本人の友達」は「強い繋がり」の人間関係と言い換えることができよう。リンはこの「強い繋がり」についても言及している。リンによれば、「紐帯が強いほど、得られた社会関係資本が表出的行為の成功に影響しやすくなる」とのことである。他者がより良い資源を持っているとしても、もし彼らとの関係が規範的な互恵性、信頼、相互の義務に裏打ちされたものでなければ、その他者は行為者本人のアクセスの望みを受け容れないかもしれない。親密な関係は、社会関係資本にアクセスする為の必要条件なのである<sup>33</sup>。

Uさんの場合、来日後最初のステップとして、PTAに所属することで「弱い繋がり」を獲得し、よりよい社会関係資本を得た。そして次のステップにさしかかり、閉鎖的でより強度な信頼に裏打ちされた「強い繋がり」を模索し出したと解釈できる。すでに良質な社会関係資本を得ているUさんにとって、「強い繋がり」を求める動機は社会関係資本へのアクセスのためというよりは、「寂しい」という言葉からわかるように、情緒的な安定を得るためであるように筆者には感じられた。「強い繋がり」も「弱い繋がり」と同様、それを獲得できる場が

<sup>31</sup> ピエール・ブルデュー（石井洋二郎訳）、1990年、『ディスタンクシオン I』、藤原書店、6頁、訳者の注釈より引用

<sup>32</sup> ナン・リン（筒井淳也ほか訳）、2008年、『ソーシャル・キャピタル 社会構造と行為の理論』、ミネルヴァ書房、86～89頁

<sup>33</sup> リン、前掲書、85頁

必要になるだろうか。場に頼らず自然と獲得できればそれに越したことはないだろう。ただ、日々仕事や子育てに忙殺され、慣れない環境に馴染むのに精いっぱいな外国人の母親たちに、それを期待させるのは酷である。形式ばらず、気楽な付き合いのできる人間関係を築くことのできる場があれば、外国人の母親たちは精神的な安らぎを得られるかもしれない。一方で、リンが「社会関係資本の不平等によって、女性やマイノリティは、よりよい関係的資源を動員する機会や、キャリアの獲得や昇進の機会が少なくなってしまう。不利な立場にいる者が良好な地位を得るためには、戦略的行動をとって、自分達の通常の交際圏を超えて資源へとアクセスすることが必要になってくる<sup>34</sup>」と述べていることから、(U さんにとっての PTA のような)「弱い繋がり」で結ばれたコミュニティが日本で暮らす外国人の母親たちにもたらず便益ももちろん大きいと考えられる。次章では、そのような「強い繋がり」「弱い繋がり」両方の強みを兼ね備えた場について考察したい。

#### 4章 外国につながる母親たちへのサポート

##### 1節 行政やボランティアグループが用意したサービス

U さんは、日本の食事や子どもの健康のこと等を市役所に相談したと答えていた。子どもの食生活や病気・怪我に関する心配事が尽きないのは、国籍を問わずどの親にとっても共通する事である。山岡のアンケート調査でも、「子育て生活の中での気がかり」の第3位は「病気やケガ」という項目であるし、山岡自身も、日本語が十分にできない状況で子どもが病気やケガをしたときに、病院を探して訪ねその後の治療法を聞くのはたいへんなことであると指摘している<sup>35</sup>。このような母親たちに向けたサービスにはどのようなものがあるだろうか。

たとえば、インターネット上でアクセスできる便利な情報として、かながわ国際交流財団の「多言語医療問診票」、「かながわ多言語情報リンク集」などがある。多文化共生センターでは、多言語による生活相談・医療相談を行っており、ブラジル医師による電話での多文化医療相談もある。これはどこからでもアクセス可能で、保険証も不要である<sup>36</sup>。

現在約 12 万人の外国人が生活している埼玉県では、「埼玉県外国人ヘルプデスク」という電話相談窓口を設け、電話で簡単な相談に対応し、専門的な相談は関係機関を紹介してきた。また、県や市町村役場、病院等の公共機関で日本語が分からず困ったときは、電話での通訳に応じてくれもする。対応言語は英語、スペイン語、中国語、ポルトガル語、ハングル、タガログ語、タイ語、ベトナム語などである<sup>37</sup>。また、埼玉県、法務省、埼玉県社会保険労務士会、埼玉県国際交流協会が連携して開設した「外国人支援相談センター埼玉」

<sup>34</sup> リン、前掲書、123 頁

<sup>35</sup> 山岡、前掲書、20 頁

<sup>36</sup> 同上、26 頁

<sup>37</sup> 財団法人埼玉県国際交流協会 HP (<http://www.sial.jp/support/consulting.htm>)



では、労働相談や入管相談に対応してきた<sup>38</sup>。2010年4月1日には、「埼玉県外国人ヘルプデスク」と「外国人支援センター埼玉」の2つの相談窓口を統合し新たに法律相談を加えた「外国人総合相談センター埼玉」が開設され、ワンストップでのサービス提供の徹底に踏み出した。ここでは生活相談や電話での通訳のほか、専門家による対面相談も実施されている。労働相談や入管相談に加え、親族関係などの法律的助言を必要とする外国人からの相談に、埼玉弁護士会と連携して対応することも可能となっている<sup>39</sup>。

また、学齢期の子どもをもつ親にとって、子の日本での進学も心配ごとの一つである。山岡は調査の中で子育てへの自由意見を求めたが、滞在年数が長い外国人ほど「日本社会での子どもの将来が心配」という解答が増えることがわかっている<sup>40</sup>。そのような両親、ないしは学生本人をサポートする機会にはどのようなものがあるだろうか。独立行政法人日本学生支援機構は、大学、短期大学及び専修学校への進学を目指す外国人学生を対象に進学説明会を催している。2010年7月には東京と大阪の2都市で開催され、国公立・私立の大学とその他機関を、東京では135機関、大阪では94機関を呼んで個別相談を含む説明会を行った<sup>41</sup>。埼玉県も、日本語を母語としない中学三年生とその保護者を対象に高校進学の説明・相談会を開催している。中学校や高校の教師の説明、現役の高校生などの体験談を聞いたり、通訳付きで個別相談をしたりすることが可能となっている<sup>42</sup>。

埼玉県川口市では、商業施設内にある「かわぐち市民パートナーステーション」に国際化コーナーを設置し、外国語で川口市の情報提供、簡易な生活相談、日本語教室の案内を行っている。対応言語は日本語、英語、中国語である<sup>43</sup>。ここには上記で述べた埼玉県の相談窓口や国際交流団体のチラシ、NPOやNGOなどが主催しているサークルのチラシなどが多く並べてあり、誰でも手にとって見るできるようになっている。筆者はここで、「多文化子育ての会 Coconico」というサークルのチラシを見つけた。次節ではそのサークルを紹介し、子育てをする外国人の母親のコミュニティのあり方を考えていきたい。

## 2節 外国人の母親たちのコミュニティ

---

<sup>38</sup> 同上 (<http://www.sial.jp/jigyo/siensodan.html>)

<sup>39</sup> 埼玉県 HP (<http://www.pref.saitama.lg.jp/site/tabunkakyousei/senmon-sodan.html>)

埼玉県県政ニュース HP

(<http://prosv.pref.saitama.lg.jp/scripts/news/news.cgi?mode=ref&yy=2010&mm=3&seq=157>)

<sup>40</sup> 山岡、前掲書、24頁

<sup>41</sup> 独立行政法人日本学生支援機構 HP

([http://www.jasso.go.jp/study\\_j/info\\_guidance\\_fair\\_10\\_j.html](http://www.jasso.go.jp/study_j/info_guidance_fair_10_j.html))

<sup>42</sup> 埼玉県県政ニュース HP

(<http://prosv.pref.saitama.lg.jp/cgi-bin/scripts/news/news.cgi?mode=ref&yy=2010&mm=7&seq=73>)

<sup>43</sup> 埼玉県川口市 HP (<http://www.city.kawaguchi.lg.jp/ctg/C328/328.html>)

1 節で紹介したのは、具体的な相談に対応する機関である。本節では、よりプライベートな交流が可能となる場を紹介したい。

2010 年 9 月、筆者は埼玉県さいたま市で活動している「多文化子育ての会 Coconico」を訪ねた。ここでは毎週木曜日に、未就学児を子育て中の外国出身者、これから出産予定の外国出身者を対象に、「仲間づくり・居場所づくり・水平な関係づくり」(Coconico 代表・芳賀洋子さん)を目指して活動を行っている<sup>44</sup>。

Coconico は、日本生活協同組合連合会が運営する建物の 2 階で活動している。筆者がこの建物に入った時、芳賀さんとスリランカから来たという高校生の女の子 S ちゃんが一階のロビーでちょうど進学について話しているところであった。挨拶をし、二人と一緒に活動場所の 2 階に上がると、Coconico の中心メンバーである日本人女性の I さんと O さんが迎えてくれた。「今日は雨だから、あまり人が来ないかもしれませんが…」と O さん。活動は毎週行われているが、参加は任意のようである。

Coconico に参加しているのは、マレーシア、中国、台湾、モンゴルといった地域から来日した親などで、そのほとんどが 1～3 歳の子どもをもつ専業主婦の女性である。O さんによると、2009 年に初めて、Coconico が主催する絵本の多言語読み聞かせ会を市内の商業施設内で行ったという。これは「スーホの白い馬」等の絵本を Coconico 参加者の母親たちが多言語で読み聞かせるもので、日本人を含め 70 人ほどの親子が集まり盛況のうちに終わったそうである。これを機に Coconico の存在を知り、活動に参加するようになったという母親もいるとのことだった。筆者が O さんと話をしている間、すぐ隣で S ちゃんもニコニコと話を聞いている。「S ちゃんは子どもたちと遊ぶのがとっても上手」と O さん。S ちゃんもよくこの活動に参加しているようだ。

しばらくして、モンゴル人女性 D さんと日本人女性 I さんがそれぞれ 2 歳の娘と一緒に入ってきた。子どもたちは部屋にあるおもちゃや絵本で自由に遊んでいる。母親たちと O さんは子どもに声をかけたり一緒に遊んだりしながら、これから開催する予定の「お話し会」で披露する手づくりのパネルシアターの構想を話し合っていた。たまねぎやにんじんなど野菜の形に切った紙を用意し、その野菜の名前を一つずつ多言語で紹介して「これは日本語で何と言うでしょう？」と子どもたちに問いかけ、正解が出ると紙の野菜がスープ鍋の中に入っていく、やがて具だくさんのスープが出来上がる、という内容はどうだろうか、などといった会話をしていた。多言語を織り交ぜたレクリエーションを、母親たちが自発的に考えているようである。その日、自身の手づくりのブラウスを親子おそろいで着ていた D さんは裁縫が得意なようで、I さんと O さんから「エプロンシアターもいいかもしれないね。野菜をフェルトで作ったりしたら可愛いし、D さんお裁縫得意だし」という提案もあった。

しばらくして、中国人女性が首の据わった子どもを抱いて入ってきた。子どもを横に寝

---

<sup>44</sup> 多文化子育ての会 PDF ちらし (<http://www.sia1.jp/pdf/kosodatenokai.pdf#search=多文化子育ての会 coconico>)

かすスペースを作り、母親も会話に加わる。芳賀さんやSちゃんが子どもを抱いてあやしたりしている間、母親はほかの母親たちにおんぶひもの使い方を教えてもらっていた。

活動の最後に、絵本の読み聞かせがあった。毎週の活動内容は細かく設定しているわけではないが、最後に絵本を読むことだけは毎週必ずやっているのだという。この日はSちゃんが、日本の絵本をまず日本語で読み、その後スリランカ語に翻訳してもう一度朗読した。子どもたちはじっとSちゃんの話に耳を傾けていた。

Coconicoではこの絵本の読み聞かせをとくに重視しているようである。「家庭内言語で、お母さんだけが母語、というケースがほとんど。お母さんは、本当に言いたいこと、複雑な心境や思いを日本語では上手く言い表せず、苦しい思いをすることもある。Coconicoでは、お母さんが自分の言葉を使えるように、というのを大事にしている」と芳賀さんが語るように、外国人が自身のエスニシティを全面に発揮して活躍できる場を、との思いが絵本の多言語読み聞かせに込められているのを強く感じた。

また、芳賀さんは「外国の人が地域の中で何かを一緒にやるのが一番大切」と話した。ではCoconicoが地縁組織的なあり方を目指しているのだろうか。地縁組織とは、町内会、PTA、防災協会等の総称で、地域社会の運営、管理のため、細かな行政事務や祭礼等の行事・親睦、防災・保安に至るまで包括的、網羅的に活動する組織の事である<sup>45</sup>。Coconicoの普段の活動には、「地縁組織」という言葉から連想されるほどの具体的な目的意識の共有や拘束力が存在していない、というのが筆者の印象である。そしてだからこそ、外国から来た母親たちにとって居心地の良い空間を提供していると感じた。母親が「雨が降ったから今日は行かない」というライトな感覚で所属でき、子どもを遊ばせながら母親同士でとりとめのない世間話が自由にできる。Coconicoの活動は、公園で母親たちがするような「井戸端会議」の延長線上にあると言えるだろう。そしてこの井戸端会議では、おんぶひもの使い方やブラウスを作るのに必要な生地の大きさ・作り方など、日本人の母親にとっては何と言う事はなくとも外国人の母親にとっては得難く、かつ価値ある情報が多く交換されているのである。

もちろん、地縁組織といった形態はそこに住む人を基準として考えられた仕組みであり、もともとの住民と新来の住民とのトラブルがあることも否めないものの、確かに「同じ住民同士」という意識が根底に根付いていることも認められる<sup>46</sup>。Coconicoも、市民に向けた絵本の読み聞かせの場を市内の商業施設や図書館に設定しており、その意味でも、地縁を下敷きにしたサークルであることは間違いないだろう。ここで、芳賀さんの「地域の中で一緒にやるのが一番大切」という先述の言葉が生きてくるのである。

普段は母親同士で自由に他愛のない話に花を咲かせ、お話し会では母親たちが主役となり、母語でもって地域の子どもたちと触れ合う。ここでは、外国人の母親が家庭以外の外

---

<sup>45</sup> 日本総合研究所 HP (<http://www.jri.co.jp/page.jsp?id=14362>) より

<sup>46</sup> 吉富志津代、2008年、『多文化共生社会と外国人コミュニティの力 ゲッター化しない自助組織は存在するか?』、現代人文社、155頁

部の世界との接点を獲得することもでき、また同時に同じ境遇の外国人の母親や日本人スタッフとの精神的な「強い繋がり」を築く事も期待できると言ってよい。なぜならば、たとえば「裁縫が得意である」という個人の情報がメンバー間で共有されているという状態からも、個人間の緊密な繋がりや相互の信頼関係が存在していることが見て取れるからである。この Coconico のあり方は、外国から来た母親と地域の双方を力づける可能性をもっており、外国人の母親のためのコミュニティの非常に優れたモデルケースである。

## 5章 外国人の母親へのサポートの理想的なあり方とは

本節では、1 節と 2 節、及び U さんのインタビューも踏まえつつ、外国人の母親へのサポートの理想的なあり方を提言したい。

まず、U さんの「日本人の知り合い」と「日本人の友達」の区別から、筆者は外国人の母親には大きくわけて 2 種類の悩みがあることを導いた。一つは「日本で生活していくのに必須な、緊急性の高い問題」、他方は「緊急性は低い、心の拠り所という問題」である。前者は例えば子どもの病気やケガの心配、進学不安などであり、後者は友達ができない寂しさや、子どもが「日本人」になっていくことへの喪失感などである。この両者は言わば車の両輪で、どちらか片方がクリアされていない状態でも母親が受けるストレスは大きいだろう。

本章 1 節では、緊急性の高い問題に対応できるさまざまな機関を紹介した。しかし、埼玉県に住む U さんに、県が行っているそれぞれの機関のチラシを見せ「このような機関があることを知っていますか」と尋ねた所、「知らない」とのことであった。せっかく制度が整っていても、それが肝心の対象者に知られていなければ意味がない。そこで、Coconico のような子育てサークルの存在に期待したい。というのは、国籍を問わず仕事や子育てに追われる母親たちにとってもっとも有効な情報入手手段は「口コミ」だからである。また、子育てサークルのようなコミュニティで「弱い繋がり」を獲得することは、先述のとおり、よりよい社会関係資本へのアクセスを期待できるということでもある。子育てサークルが気軽に参加できる場であれば、母親同士や日本人スタッフとの横のつながりで各種公的サービスに関する情報を交換しあえるだろうし、場合によっては、イベント等で行政と協働するなど縦のつながりにアクセスすることも考えられるのである。また、「弱い繋がり」で結ばれたコミュニティの内部で個人間の「強い繋がり」を築く事も期待できる。境遇の似た母親同士は、それぞれの有する／欲する情報などの資源の類似性も高いことが考えられる。お互いが交流する事で、普段は表面化しにくい「緊急性の低い問題」を解決する糸口をも見つけられるかもしれない。

そこで注意したいのは、日本人スタッフ側の準備である。吉富志津代は外国人向けの日本語教室を例にとり、「日本語の理解の不十分な外国人にとっては、日本語教室の場が地域社会との唯一の接点になることが多く、相談された内容により解決の困難な無理な頼みご

とを教師が引き受けることになってしまい、トラブルに発展することもある<sup>47</sup>。」と述べている。サークルの日本人スタッフが全てを抱え込むのではなく、あらかじめ公的な各種機関と連携し、いつでも適切に紹介できるよう準備を整えておくことが必要となるだろう。

ここで、各種公的機関とサークルとの連携というテーマが出た。それはすなわち、外国人の母親を支援する NGO・NPO と地域社会との協働を意味する。吉富によると、諸外国では移民の自助の拡大はしばしばゲッター化につながっている。しかしここで提唱しているサークルのあり方は、自助組織的な機能を持ちつつも地域社会との協働を前提としたものであり、吉富の言葉を借りるなら、「そのプロセスそのものが、移民のゲッター化を抑止する可能性を秘めたものなのである<sup>48</sup>」。それどころか、サークルが公的サービスをいつでも紹介できる用意をすることで地域社会との連携が確保され、ワンストップで支援サービスを提供でき、それを受けた母親たちが地域の中で活躍しやすくなるというプラスを双方にもたらすのである。子育てサークルのような水平的なコミュニティが行政等との垂直的な繋がりを築いておくことは、参加するメンバーの便益のみならず、地域社会の便益をも増大させるのだ。したがってこのようなあり方は、「外国人支援」という一方向の流れではなく、「お互いのまちづくりのための助け合い」という双方向の意識の共有の上に成り立つことが大切なのである<sup>49</sup>。

Uさんは、「もし外国人の母親のサークルがあったら入りたいと思うか」という筆者の質問に対し入りたいと答えつつも、「でもそういうのは（専業）主婦のお母さんでしょ。私仕事だから平日の昼間は行けないよ」と付け加えた。母親をサポートするコミュニティには、働く母親が気軽に参加できるような配慮も必要とされるだろう。多文化共生センター神戸内の「ワールドキッズコミュニティ」が2007年～2008年3月末まで展開した事業である多文化託児所では、子どもを預けたいが一般の託児所は手続きが複雑で受け入れてもらうまでに時間がかかる、日本の保育士に預けることへの保育上の不安がある、といった外国人の母親たちの子どもを、スペイン語圏出身の保育士が乳児を預かってきた<sup>50</sup>。このような託児所では、子どもの送迎に訪れること自体が他の働く母親や保育士、日本人のコーディネーターと交流する接点になりうるだろう。

おわりに

ここまで、日本で暮らす外国人家族のうち特に子どもを育てる母親に焦点をあて、彼女たちをとりまく問題を提示したうえで、彼女たちに有益な「場」を提言してきた。この「場」に関して考えるとき、「強い繋がり」に重点を置いたものと「弱い繋がり」に重点を置いた

---

<sup>47</sup> 吉富、前掲書、32頁

<sup>48</sup> 同上、153頁

<sup>49</sup> 同上、126頁

<sup>50</sup> 同上、144頁及びワールドキッズコミュニティのHP

(<http://www.tcc117.org/kids/index.php?e=196>) より

もののどちらのほうが母親たちにとって望ましいか、といった比較を行うことは筆者の本意ではない。筆者が強調したいのは、「強い繋がり」と「弱い繋がり」、そして「水平的なつながり」と「垂直的なつながり」を複合的に持ち合わせ、参加メンバーが状況に応じて戦略的に便益を図ることが可能である場合こそ、母親たちと地域社会の双方をエンパワーメントできるだろう、ということである。

ロバート・D・パットナムは、「ソーシャル・キャピタルの十分な蓄積に恵まれているコミュニティでは、生活はより心地よいものとなる。(中略) 相互作用の緊密なネットワークは、おそらく参加者の自我意識を拡張する効果をもつ。すなわち、『わたし』という意識から『われわれ』という意識へと発展させる。」と述べている<sup>51</sup>。たとえば子育てサークルのようなコミュニティで、マイノリティである外国人の母親たちが獲得した地域社会における社会関係資本が蓄積されていけば、母親たちと地域社会との間の互酬性は高まっていく。序章でも述べたとおり、子育ては両親のみならず、学校や地域等が関わっていくものである。したがって、たとえば Coconico の「お話し会」における多言語での絵本読み聞かせのような活動を通して、外国人の母親たちはともに地域の子どもを育てるメンバーとなってゆく。「ヨソモノ」ではなくなっていくのである。

また一つ忘れてはならないことは、外国人の母親たちについて考えることは、その子どもたちについて考える事でもある、という点である。母親にとって最善であることが常にその子どもにとっても最善であるとは限らない。たとえば4章で述べた、母語や母国の文化の問題がそうである。「わが子に母語を教えたい」という母親の自然な欲望や、家庭では母親のために母語で、外では日本語で、というように言葉を使い分けさせることは、ときに子どものアイデンティティ・クライシスを引き起こしてしまう。それは逆もしかりである。子どもにとって最善と思われることを他者が一方的に決めつけそれを奨励する事は、その母親の思いを無視した行為ではないか。「日本で生きていくつもりなら、日本人と同じように振る舞い、日本語を話した方が有利である」と、それが例え事実だとしても他者が外国人の子どもに対して言い切ることができるだろうか。その裏で、自分の子どもが自らのルーツである文化・習慣から切り離された「ニホンジン」になっていくのをやるせない思いで見ている母親がいることを忘れてはならないだろう。子育てをする外国人の母親について考える事は、ときにデリケートな問題を孕むのである。

それでも筆者は、本論文の締めくくりを希望のあるものにしたいと思う。Coconico 代表の芳賀さんから、「最近感ずること」として、「Coconico が居場所になってきていること」「この場を足掛かりにして成長している人たちがいること」「日本社会への働きかけが小さいけれどもできてきていること」と箇条書きにされたメールをもらった。小さなサークルが、少しずつだが現在進行形で大きな力を発揮し始めている。また、4章のインタビューに協力してもらった U さんからは、本論文の草稿を読んでもらった後に、「子どもがいじめられ

---

<sup>51</sup> ロバート・D・パットナム (坂本治也・山内富美訳)、「ひとりでボウリングをする」、宮川公男・大守隆編、2004年、『ソーシャル・キャピタル』、東洋経済新報社、58～59頁

たり、こんな思いするの、私だけとってた。でも違うね。外人の親、みんな大変だね。」という言葉ももらった。辛い思いを「わたしだけ」で抱いているより、「みんな大変だ」と認識できている方がいくぶん楽になるのではないか…といえば、単なる気休めだと言われるかもしれない。それでも、その「みんな」が断片的に持っている情報や資源を交換できた時、それは気休めでなくなる。より有益な資源にアクセスできるようになり、子育ての大きな原動力になりうるのである。そしてそのようにして社会関係資本が蓄積されてゆくことは、地域で子どもたちを育てる力、ひいては地域を動かす力にもなりうるのではないか。そこにこそ、母親たちが「繋がる」意義があると筆者は考えているのである。

他者の子育てのフィールドというのは、現在子育てに直接携わっていない者が意識していないだけであって、実は常に身近に存在しているということを、今改めてここに記したい。外国人の子育てに、誰もが潜在的・間接的に関係をもっているのである。

いま一度述べる。筆者はこの論文をすべての人に向けて執筆した。国籍や年齢、性別は一切問わない。子育て中のすべてのパパ・ママに、過去に子育てを経験したパパ・ママに。これからパパ・ママになる人に、身近に子育て中のパパ・ママがいる人に。そして、これらのどれにも該当しない人にも。母親について考える事は子どもについて考える事、それはつまり私たちの社会について、未来について考える事でもあるのだと最後に述べ、筆を置きたいと思う。